

風景はこころの旅



カメラがデジタルにかわり、その資料、記録の保存が膨大になっている
次々と新たなものを撮っていき、過去のものは忘れ去られ、保存として溜
まっていくのみになっている
中には心に残る作品もあるが整理もままならず、一纏めに記憶しようと思
い挑戦したのがこの「風景はこころの旅」集であった
作品的には見劣りのする作品ばかりだが、私にとってはこころの旅である
風景のみならず、スナップも含めた、1つのファイルとしての記録でもある
この旅はカメラを持てるうちは今後も続く旅である

村 田 恭 三
2012.4.23



春うらら

春、近くの恩智川には、毎年菜の花が
咲き乱れる
この川に近年大きな鯉が群れている
釣人は年中釣りを楽しみ、春は一段と釣り
人を賑わせている



大阪城梅林

大阪の春は梅林から始まる、2月になると
待ちかねた様に人々が訪れ、シーズン中
賑わいが絶えない
そんなことで、毎年来てるが、毎年同じ様
な写真を撮っている技のなさ



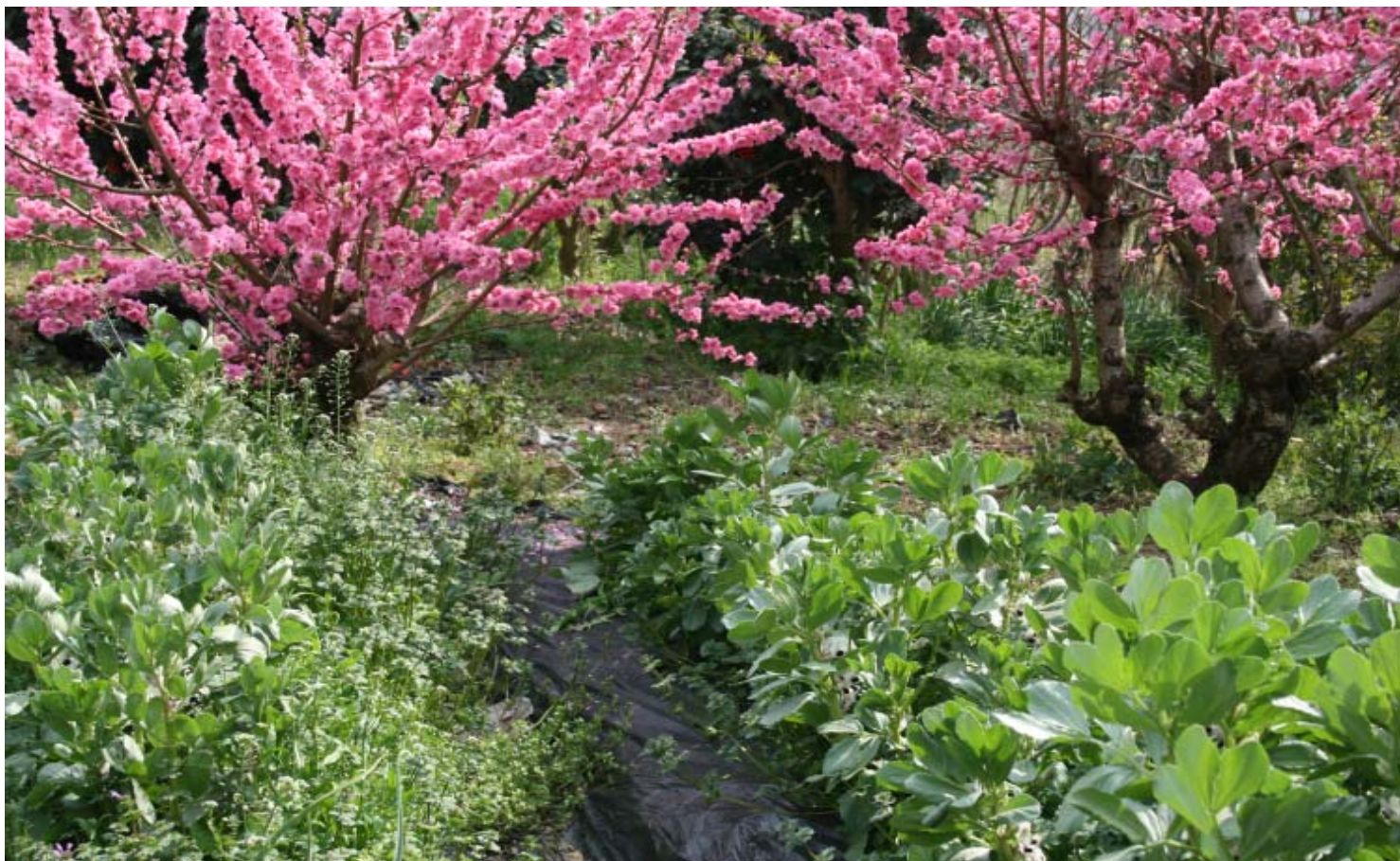
梅は庭木が一番

梅の名勝は数々あるが、庭木の梅に勝るものはない
八尾神立地区に行くと、どこの家でも花木
がたくさん植わっている
春先、梅が一段とさえている



東風吹かば

梅は古木、北野天満宮の春は賑やかだ
数えきれない古木に、一斉に花がつく
参拝者は梅見学の観光客にかわる
京の春はどこの神社も観光客で沸き立つ



日本人の心のふるさと

どこにでもあった風景、この風景を日本人は忘れている
都会の殺伐とした中でしか、生きられないと思ってしまった
自然のなかに癒しのふるさとがある



ボケは春ボケ

この花がボケという名だと知った時から、なぜ
ボケなのだと不思議だった
それが、最近ようやく分かってきたように思う
寒のうちから咲きだし、春の最後まで咲いている
いつが旬だか解らないが、正に今が旬なのだ
トゲがあってうっかり触れると引っかかる
綺麗な花にはトゲがある、誰かと似ている



咲くも桜、散るもさくら

さくらは咲くばかりが、桜ではない
いさぎよく咲いて、いさぎよく散る、これぞ
桜の醍醐味
そして、散りあとに第二の姿が見えてくる
人も散り際で、その人の人生が見える



自然の造形

桜の時期は短い、散ったあと、思わぬ光景が待っている
「花いかだ」水面を流れ、そして浮かび、そこには又別の桜を見せてくれる
花びらの自然芸術であろうか



優雅なお店

大和、高取町の雛祭りには豪華で華やか
どこのうちも、それぞれ立派なお雛さん
が並ぶ、大和名物「陀羅尼助」お薬屋さん
も例外ではない



春の昼下がり

ぽかぽか陽気、春の午後桜の下での居眠りは最高の
感触であろう
人さまは花見弁当で楽しそう、まちびとは居眠りで
うらかな、ひと時を過ごす



春を呼ぶ炎

「水取りや氷の僧 の沓の音」芭蕉は寒のお水取を
うたっている
奈良は二月堂のお松明で春が来る
駆け付ける、善男善女で、境内は期間中賑わう



水ぬるむ

春が待ちどろしいのは人ばかりではない
鳥たちも、亀さんも春を待っている
水辺では動物たちも春を感じているので
あろう



獲物を狙う

餌捕りが活発になる頃、水辺では鳥たちも忙しくなる
何を狙っているのだろうか、じっと動かない、これは忍耐なのだろう
人も大事なときは、この忍耐が肝心だ



牡丹咲く頃

花の寺、長谷寺は牡丹で有名だ おなじ方向に
同じ時期に咲く、石楠花で名高い室生寺がある
どちらに行くか決め難い、そこでこの時期、長谷寺と
室生寺の間をバスが出ている
長谷寺も室生寺も大和の寺の代表格、観光客は双
方に行きたい



清そな石楠花

石楠花は牡丹と同じ時期に咲く、豪華な牡丹の花より、控え目な感じがする
それでも、石楠花の格が落ちることはない
山すそに咲く石楠花、一歩控えているように見える



初 夏

人はこの風景をみて、何の作品的価値にも観えない
だろうと思う
作者は、偶然にここに立った時、辺り一面に咲く、こ
の名も知らない花をみて何か感動のような思いをした
ことが忘れられない



城北公園、菖蒲園

大阪にも、大阪城公園から、長居公園等々整備された公園が多くある
年に一度、菖蒲の時期思い出したように、賑わうのがこの城北公園だ
大阪人はこの菖蒲園を楽しみに今年も通う



紫陽花道

紫陽花を撮るには山紫陽花がいい、それには努力がいる、努力を最小限に考え、雨あがりの後、山をみるとモヤがかかり、ガスが出ていた
急いで登る、これは氣力と体力がいる



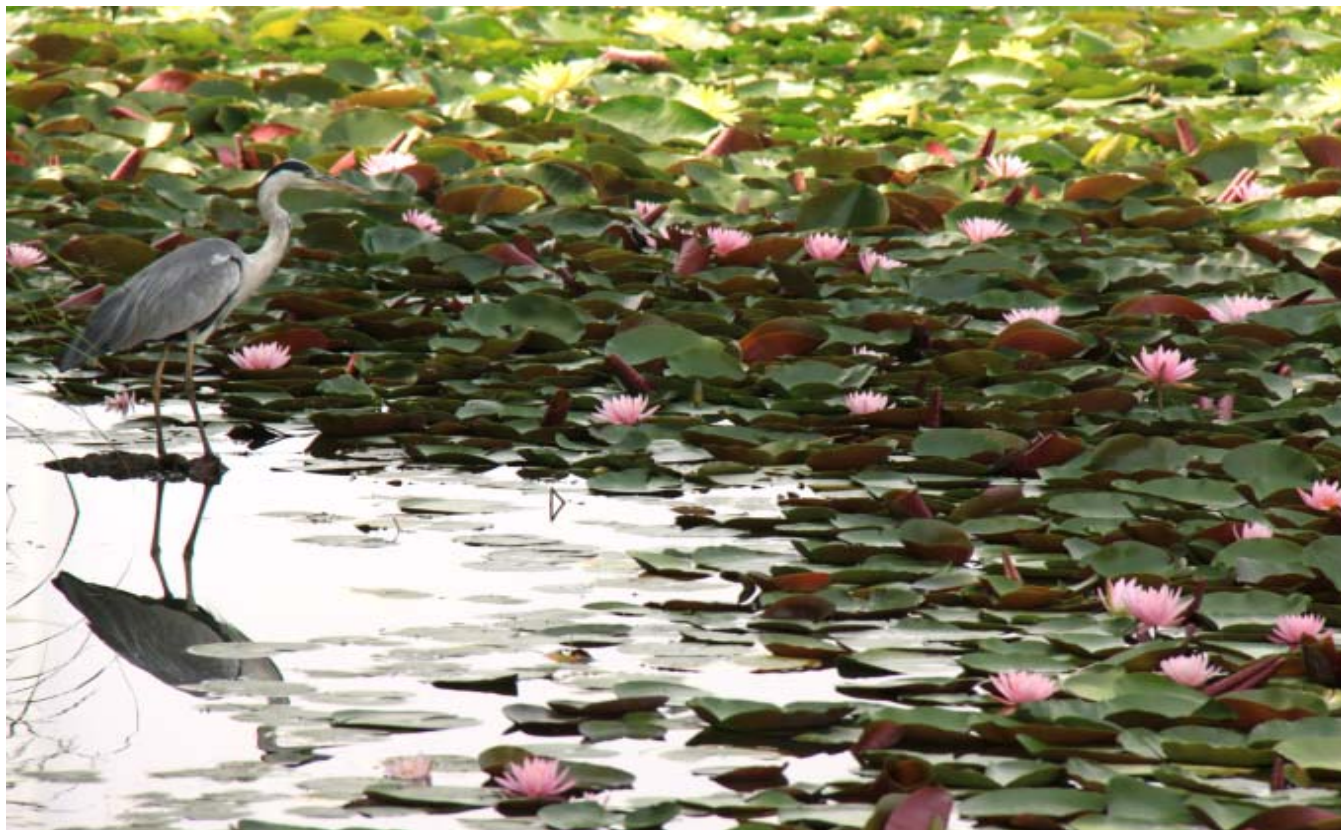
夏の暗峠

暗峠は、庭先のようなところで、四季折々によい
生駒山ハイカーの、溜まり場のところでもあり
旧奈良街道が現在の国道になっていて、車でも
登れるが、やはり歩いて登ることに意味がある



額紫陽花

最近、額紫陽花が増えた、それも西洋系
紫陽花は枝切りを間違わなければ繁殖
はいいようだ
増えているのは、額が多いようにみえる



サギと睡蓮

ハス池には睡蓮がつきもの
そこにサギが餌を漁りにくるのを善く見る
その、普通の風景を普通に撮った
普通の凡作

蓮ひらく

前作と同じで、感動のない作品
同日、よほどこの日は善くない
日だった
そうだ、真昼の晴天、これでは
ちょっと無理だろう





蟬の休憩

前2作より、これの方が面白い、蓮池の蓮の裏で
休んでいる蟬など見たことがなかった
どこで休もうと蟬の勝手
この時はここが一番居心地が良かったようだ



かやぶきの里

雨の日のかやぶきの里は情緒がある
その中でひとときわ輝いているのが赤い郵便ポスト
赤いポストが、この里の名物になってしまった
里のどこからでも見える、目印でもある



里の夏

子供の頃、田舎ではどこの家でもかやぶきだった
夏涼しく、冬暖かい、思い出の故郷
この光景も姿を消して、文化保存の時代になった
その文化保存の中で暮らせる、住み家は最高の
贅沢だろう



夏のタックル

東大阪はラグビーの町、花園は高校ラグビーの聖地
シーズンオフの夏には、人影も少ない
誰も目に付かない所で、模型人形が横たわっている
夏草のなか、いまにも声援が聞こえそうだ



夏 祭 り

夏祭りには、昔ながらの光景が、今でも続いている
金魚すくいなど、夏祭りならではの子供達の楽しみだ
子供の小さいころよく出かけた記憶があるが、それも
いまではなくなった 大きな祭り以外は、氏神さんの
祭りすら忘れている



虫たちの夏

夏は生ものたちの夏でもある、草むらにはバッタに
カマキリ、いきいきとした、世界のはずだったが、
あるものは、力つき、命ちつき、生命の終わりのよう
で、彼らの短い夏も終わる、精一杯、生きたのであろ
うか



夏の終焉

人間には、暑くて長い夏も、生物たちの夏は短い、
ひまわりも、短い夏の終焉を感じる
自然はいつも季節の先取りをする、鈍感な人間には
観えない、晩夏の時期に近づいている



生命の存続

生物たちにも子孫の引き継ぎの時期がくる、短い一生だが、命は永遠と引き継がれる
来年また、彼らの子孫が飛びまわるときがくる
次にみたとき、彼らを想い出すことだろう



初秋の装い

先の写真でも観たように、夏、真っ最中、自然は早や
晩夏から初秋の装いがしている
「夏来たりなば秋遠からじ」秋は足元まできていそう
な気がする



華やぐ亀石

飛鳥の不思議な石たちの中でもこの亀石は有名だ
昔、我々の若い頃、田んぼの中にあった記憶がある
今では柵に守られ、情緒は薄れた
撮る気が起きなかった亀さんを、偶然に撮れた



萩こぼれる

秋、一番の花は萩だ 萩はこぼれるように落ちる
こぼれたその花びらを踏まないように、そろりそろり
と歩く楽しさ
萩は昔人の詩にもよく出てくる秋の代表の花
こぼれ落ち、そこで又咲く、こぼれ花



水しぶき

水辺にはいつも遊びがある、子供から若者まで
人は水辺が好きなようだ
恵みを貰うのも、危険が隠れているのも水である
水の一滴は血の一滴とも言われる国もある



街角のアート

1億、総芸術家と言われるほど、人は絵が好きだ
何処にいても絵を描いている、それほど絵は魅力的なものなのだ
描けば見てほしい、そこで即席の画廊ができる
芸術とはそんな中から生まれるのかもしれない



秋の棚田

見飽きた風景を、いつまで見ていても、見飽きしない
心の原点、心の故郷とはこの様な風景であろう
明日香は秋輝く、どこを見ても彼岸花でいっぱい
暑い夏から解放された人たちが、どっと押しよせる
ふるさとへ帰るがごとし



飛鳥人も見た飛鳥川

私が写真に魅せられたのは、故入江泰吉の飛鳥の
写真集だった、今では到底その時の情緒はない
幻を観ているようだった、少しでも近付きたいと思
いでここまで来ていたが、あれは、やはり幻だった
いまにも飛鳥人ができそうな匂いは感ずる



秋の園

コスモスの群生を撮るのは難しく、作品になりづらい
背景の処理が難しい、背景を消したらこうなった
そこに撮り手の技量の貧しさ
「無用の用」無用も用なり、感情が欠けている



季節は秋

自然は夏と秋を同居させる 夏に秋の花が咲いたり
秋に夏の花が残っていることはよく見る
ひわまりがまだ頑張っている、ころもなしか淋しそう
に見える、自然はまさしく秋だ



仲 秋 の 秋

秋にすすきはよく似合う、すすきをみていると、その
道の人是一句でできそうだ
すすきは夕景がいいのだが、これは間昼、それでも
すすき野で子供と遊ぶ姿は、親しみを感じてくる
質素が一番、花はないが、すすきが開いたという



暮れゆく秋

偶然に通った夕暮れ、雲った空の谷間からかすかな
日が差してきた
その僅かな瞬間、1枚の絵ができた
この作品、ほんの僅かな条件に出会っただけ



祭りの日

祭りの日は、老若男女、全員参加する、若い娘も
この日は主役、神輿を担ぐか、だんじり引くか
町全体が祭り一色になる 出番待ちもまもなく本番
景気を付けてハイ出発



ぼくらのだんじり

祭りだ、祭りだ、わっしょい、わっしょい、それ引け
それ押せ
子供の頃から祭りには馴染んでいる、町の人びと
全員が祭りの中にある
全国版になった、岸和田だんじり祭り



夜明けの輝き

自然は時として、びっくりする様な姿を見せることがある この時期、生駒山はこの辺りから日があがる
山の西側では日の出は少し遅い
日が顔を見せる頃には、日差しはきつい
その日の出前、空が赤く染め上がった、黒い雲が
一層空を美しく見せる



山頂の虹

雨模様の日没時、雲の間から日が差してきた、その
僅かな瞬間、思わぬ虹が立ちあがった
自然は時として、思わぬ一瞬を見せてくれる、それも
つかの間、幻想のようでもあった



輝く黄昏

いつも通っている道でも、ちょっとした見る目を変えれば面白い光景に巡りあう
汚れた小さな赤い輪が、変身した瞬間だ
この汚れたホースが輝いた



暗峠の営み

暗峠の秋は、たんたんと過ぎる いつもと変わらぬ
営みがつづく
稲の刈り入れも早くに済んでいる ハイキング人だけ
は一年中この地を訪れては去ってゆく



縄張り

蜘蛛は秋も活発に活動する、蜘蛛は越冬するのか知識に乏しい もし、越冬するなら秋に食糧がいる 果実の匂いに引かれて、虫が寄ってくればそれが餌食になるのだろう



クライマックス

時代とともに、変わるのが常で、だんじり祭りも派手になった とはいっても始めてきたので以前のことは分からない
泉州地区のだんじりが全国版になった事は違いはない
伝統祭りは、古風と目新しさの競合が難しい



祭りの日

このとき、一瞬何が起こったのかと思った
大きな爆竹、それも1回のみ、1回でよかった
何も考える間がない、偶然の1枚、この光景のみ
予期しないことが起こるのは、それが祭りの狙い
この日、2度と撮れなかった、貴重なもの



雨の宮入り

枚岡神社の秋郷祭、あいにくの雨の祭りになった
ずぶ濡れのなか担ぎ手、引き手には無常の雨だったが、撮り手には新鮮に観えた
例年同じような光景で、代わり映えがしなかった
運の悪い雨が、我らには幸運なチャンスをもたらった



踏切のお渡し

枚岡祭りは踏切を渡るのが常例だ 駅員さんも慣れたもの それでも電車はたえず走る
開いた一瞬の僅かな間に渡る、しかも坂道、満身の力のだしどころ 次も渡れるか
細い道をゆくのがこの祭りの醍醐味



雨の祭り

ウォ〜と、たしかにそう聞こえた、何トンの重さがある
のか、若い力が発揮する
雨で足下が滑る、肩に荷がくい込む、思わず力が入
る ただ踏ん張るのみ
日頃とは違う顔を見せてくれた



氷 雨

お気に入りの1枚、雨の祭り、この光景が撮れたのは
幸運だった 太鼓台の宮入り前の順番まち
この子らが引き手だったのか、寒そうに休んでいた
そこに、なんとも言えない情緒を見た



かやぶきの朝

朝、大阪を出るときはそれ程冷えは感じなかった
京都、南禅寺についた時、かやぶきの屋根から蒸気
が上がっていた
一瞬にかとおもえた 冷えた屋根に日差しが差し込
み、蒸気となり、もやっていた
夢中でシャッターを押していた



光 芒

写真は影と光、薄暗い斜面にいきなり光が差した
一帯の様子がかかった 小高い斜面を駆け上がった
つかの間の光景、それも一時、元の静けさに戻って
いた チャンスは一度だけ、2～3枚撮れただけ幸運
というものだった



秋 輝 く

紅葉を見るとき、鮮やかに色づいた山全体を見るとき
の感動と、1～2本の色さえた古木を見るときがある
これは、まさしく狭い寺の古木だった
まるで、色を塗ったような紅がさえていていつまでも
見惚れて、離れられなかった



熟年の旅

旅は秋がよい、それも京都なら最高だ
元気な熟年の旅は羨ましい、どこに行っても、どこを
歩いても楽しそうだ
大勢の本堂での参拝者のなか、なぜか、二人だけの
時をあったようだ



静寂のとき

秋、名所どころは、どこにいても人でいっぱい
ひとけのない小道を入るとそこは静寂のなか、自分
だけの世界のようにだ
その様なところを探すのは、さほど難しくもない
足をつかって動けばいいのだ



悠久のとき

この場所には特別の想いがある 真田山、旧陸軍
墓地、大阪でもここだけだろう、いつ行っても懐かしさ
を感じる 明治以来の朽こけた墓石がならぶ
真田山は父の出身地でもあり、親族もここに奉られて
いる 秋は特に故郷のような気がする



古都秋景

奈良公園にはとこど、どころに池がある、池の側でも
シカは歩く 小鹿が一匹、母親のあとをついて歩く
よそ見をしているうち、母親に離れている、早く追いつ
かなくては、急ぎ足になっている



秋 模 様

”もみじ”そのものを捕らえるのは難しい
まさに、捕らえると言ってもよい 見た目どおりの表現
ができないことがほとんどだ
この光景は見た目より、良かったと想えた、写真では
現実より上手く写ってくれることもある



巫女さん勢揃い

枚岡神社では行事に巫女さんが沢山必要になる
その為、日頃より巫女さんの予備軍がいる、いざ
出陣、巫女さんの誕生だ
晴れ舞台で、嬉し恥かし、せいぞろい



古都の朝

冷えこんだ朝、奈良浮御堂の池では、日が上がると
池の水が蒸気として立ち上がる
この日は到着の時間が遅かった、それでも日の当たる
水面からは湯気が上がっていた
周辺の景色が真っそう、幻想的な雰囲気になっていた



霜 ふる 朝

近頃では、郊外にでも行かないと霜を見ることもない
真っ白に降り積もった霜は、情緒的にも心揺さぶる
雪が陽なら、霜は陰、つねに裏側は、淋しく吐かない
ものだ



寒 い 朝

寒そうな猫に見つめられている、こちらも寒くなる
ホイと声をかけたが、たたずんだまま
案外猫は寒さに強いのかも、人間がいちばん寒さに
弱いようだ
猫と人間、人間が先に立ち去った



陽だまり

前作が寒そうな猫だったが、この猫は暖かそうだ
瓢箪山稲荷さんの、名高い辻占い、玄関前の一等
場所、動こうともしない
「恋の辻占」受付けます 恋の成就もうけおきます



錦 秋

曇り空でも、もみじは付近を明るくしてくれる
小雨の中、それを思わせない、空気まで清らかだっ
た 善い風景は人の気持ちまで明るくする
人々はただ酔いしれているだけ



満天の秋

この紅葉見たとき、茶褐色になり、枯れたところが多かった 見た目はわるい
木の根元に転がり、真上を向いた、最大広角、雨天の空に、紅の色だけが残った
思わぬ映りに満足、満天の空をみた

もみじ幻想

余りにも見事なもみじだった、撮ることすら
忘れていた
撮る方法がわからない、建物の裏に回り
窓ガラス越しに撮った、ふと、幻想的な気
がした





古木も輝く

日頃見向きもされない古木、隣のもみじが
鮮やかなころ、古木も蘇える
この時、もみじよりこのなんでもない木に
関心が向いた
”古木と紅葉”がペアーを組んでいるように
みえた



枯ハスに紅葉

池一面に、枯ハスで埋まっていた ここでは枯ハスを主役に考えたが、紅葉の鮮やかさに負けた
昼間ではこうなる 朝夕なら違った撮り方ができた
かも知れない 斜光でハスが沈んでくれていたら たちの世界で凡作



禊 ぎ A

偶然のチャンスだった 枚岡神社の禊ぎ場
 これを撮るのは憚られた、それでも撮った
 おおやけに出すのを遠慮している 秘蔵になるのか
 光線は最高によかった、この光のもとでは二度と撮
 れないかも知れない

禊 ぎ B

前作に続く、女性にかわった ただ夢中
だった
私にはこの場でこれ以上のものは撮れな
かったと思う
半身をアップにした方がいいのか
なんともいえない光線と情景だった





大安吉日

枚岡神社での結婚式は本殿でおこなわれる
そのため、拝観者のガラガラを聞きながら式が進む
ことになる
おめでたい事にあやかるため、間近で行事を見守る
こともできる



冬 日

初詣ウォークだった、場所は宝塚の中山さん
ここには、その昔、妊婦の腹巻を受けにきた記憶が
鮮明に残っている
今では、ハイクの休憩場所に使わせてもらった



京の女(ひと)

京都祇園の幕の内、板葺に広告紙、これだけでも絵になりそうな通りに、偶然一人の女(ひと)が通ってきた。ちょっと見つめられたか、睨まれたか、1枚いただいた。京の情緒はでたと思う。

祝 日

成人式の日だったが、この老人には関わりない
それでも日の丸の旗を持っていた
これぞ、まさしく日本男子、
旗を持ち歩いて犬の散歩をするのか
これから、どこに行くのか興味があった





蹴鞠神事

正月15日は枚岡神社の蹴鞠神事、京都の保存会から、伝統行事の出張奉納だ
儀式にのっとり、慣れた足つきで鞠がとぶ
この人たちは日頃は何をしているのだろうか



爽やか青春

大阪では珍しく雪が降った 平地ではそれ程とも
思わなかったが、急いで出かけた山では積っていた
途中爽やかな青年に会った
彼らもこれ程とは思わなかったようだ、予定どうりゆく
奈良まで行くようだ、出発が泉大津、これはすごい



獅子は怖い

正月定番の獅子舞も見なくなった
イベント会場でしか見られないのは寂しい
噛まれると「無病息災」縁起のいいことだ
どうやらどの国にでもあるそうで、インドが
起源らしい 伝統行事でもこれはかなり
古いようだ、それが廃れているのはどうし
てだろうか





晴れやか成人式

今時の新成人は、役者かマダムか、一日だけの
羽目外し、これでは、行儀だっではいられない
この時とばかり、おもい切ったの派手なふるまい
とても我々の居られる場所ではない
これが写真撮りとなると、もっと派手になるとる



赤い月

早朝、真っ赤な月をみた 西北に沈もうとしている
見た一瞬なにが上がっているのかと思った
夜明け前、上がっているものなどあるはずがない
月と気づいてカメラを取りに走った
自然現象は時として、このようなことが起きる



満願の笑み

知らぬ人に笑顔を見せることは、警戒をされる
笑いは健康のもと、笑う門には福来たる
どこでも笑いたい、大声で笑えるところも少なく
なった 大声で笑えたら、人生最高のときだ



ようこそ我が町へ

歴史の町、今井町、出迎えてくれたのは土地の
おばちゃん、笑顔も爽やか、清々しい
風景より、街並みより、この笑顔が何よりの収穫
話しも軽やか、ここまで来た値ぶちもあった



少女

ひょいと暖簾のなかから出てきた少女、暖簾と少女
がよく似会った
この時、画題を暖簾とするか、少女とするかで迷った
が、ここは少女が印象深かった



古都光景

前作と同じ場所、同じ時刻、ここでも暖簾より人物に
気が引かされた
観光日本、いまや観光地は外国人でもっている
この光景が普通に感じられた、小さい自分には
思わず圧倒された



梅 一 輪

梅の写真は難しい、そこで梅一輪、一輪がすっきり
する 冬の寒さが和らぐとき、一輪咲いた梅を見た時
そこに春の到来が感じられる
「冬来たりなば春遠からじ」梅は咲いたが、桜はまだ
かいな



早 春

道端でないげなく咲いていたすいせん、今にも踏み
つけそうになった
うと、立ち止まって観ていると、なんともかれんな感じ
がした
これでも、一幅の絵になりそうだった



春の訪れ

枚岡神社本殿横の1本の紅梅が満開に観えた
枚岡梅林には毎年多くの観梅者が訪れる
遅れていた梅林にもやっと春がきた感じがする
しかし、なぜか見栄えが善くない、木が悪くなっている
ように観えた



春のいぶき

たとえ、1本の紅梅でも居場所でさえる、提げ灯籠
との共演のようでもある
よく観てみたら、古木の年輪を感じる、日頃忘れられ
ている木もこの時だけは、出番であろう
訪れる人の心をひと時癒す



山 里 の 春

ここ八尾神立の春はどこよりも早く来る
 彼岸桜から咲き始める、切り花の出荷ものだが我々
 の目にも楽しませてくれる
 桃、コブシ、レンギョウ、サンシュウと次々と咲いてくる





こぶしの丘

紅木蓮が満開を迎えている、この辺りでも
珍しい、2本の大木だった
薄曇りの中、突然付近で燃やしている煙
が風で舞い上がった
幻想的な光景にしてくれた

紅 満 開

辺り一面紅木蓮で真っ赤に染まっていた
木蓮の花は日持ちに弱い
黒ずみ花がしおれている、全体像を撮る
には悪い花が目立つ
一枝のアップで収めた、それでも木蓮の
群衆は表現できる





サンシュウ咲く

春、黄色く染まるのは、レンギョウとサンシュウだ
レンギョウは真っすぐ立ち木も大きい、レンギョウは
花はきれいだが大木にはなりにくい
どちらも、真黄で遠くからでも眼を引く
同時期に色々な花も咲き、競演になる



桜 一 番

この桜が、観桜だということは早くから聞いていた
かんを寒なのか、観なのか、やはり観桜だろうと思う
時期の早い桜に、河津桜があるが、また一味違う
風情があり、春の一番桜はやはり、観桜だと思う



背割堤の桜

八幡市の木津川と宇治川に挟まれた堤防に、大木の桜並木が続く まさに満開、大勢の花見客で賑う友人を誘って花見見物にと出かけた
桜に包まれるような雰意気で、これぞ日本人の花見
ここで食べる、花見弁当は何を食べていても美味しい



玉串川の春

満開の花の下での「三姉妹」
母親のカメラに収まった
横から1カット拝借、顔がそっくりで
愉快的な姉妹たち
この敬礼は何を意味したのか
日除けではない、日は右から
きていた いつまでも楽しく、爽
やかだった





祇園白川の春

どこに行っても京都は絵になる、白川界限は人出も
少なく、どこを向いても情緒たっぷり
人気の観光寺院を避け、白川を歩くのも面白だろう
この時はただ通過したのみで、後ろ髪を引かれる気
がした



春の流れ

奈良佐保川、川じたいは素晴らしいとも思えないが
桜並木は続く、古木もまじる ただ晴天の昼間では
作品的には難しい 日を替え、時間を変えれば撮れ
るかも知れない気はしている
いつか又挑戦する日は来るだろう